

田谷洞窟の歴史と洞内レリーフについて

—その芸術性と幕末期庶民信仰の一形態—

緒方 啓介

はじめに

横浜市栄区田谷町にある定泉寺境内にある田谷洞窟は、正式には「瑜伽洞」と呼ばれる全長約540メートルに及ぶ三層からなる人工洞窟で、平成2年に史跡「田谷山瑜伽洞（田谷の洞窟）」として横浜市登録文化財となっている。田谷洞窟については、昭和49年に早稲田大学理工学部による洞窟の構造調査や昭和50年のサンフワークラブ・ロアジュールアカデミー研究会による実測調査が行われ、「田谷山定泉寺瑜伽洞（田谷大洞窟）調査報告書」⁽¹⁾が出されている。またこれらの調査結果を踏まえて、昭和52年に吉田孝氏が『鎌倉の密教地底伽藍 田谷の洞窟』⁽²⁾を出版し、田谷洞窟を総合的に紹介されている。

近年、周辺地域の開発や自然災害などの環境変化に伴い、洞窟内の崩落や壁面の剥落等が進み、平成27年に「田谷の洞窟保存実行委員会」（代表・田村裕彦氏）が設立され、筆者はその調査メンバーの一員として参加した。筆者が担当したのは、田谷洞窟内の壁面に彫られた宗教レリーフで、本稿はその調査概要をまとめ考察を試みたものである。

1. 定泉寺と田谷洞窟の歴史

1-1. 定泉寺の歴史

田谷洞窟のある定泉寺については、江戸時代の地誌『新編相模国風土記稿』⁽³⁾（以下、『風土記稿』）田谷村の項に、

定泉寺。田谷山ト號ス。古義眞言宗 武州橋樹郡鳥山村三會寺末
本尊彌ヲ置ク。

とのみ記され、開山・開基・創建年代等に関する記載はない。

また同村の御霊社について、

御霊社。村ノ鎮守トス例祭十一月十七日。熊野・稲荷ヲ合祀ス。定泉寺持。

とあり、村の鎮守であった御霊社は定泉寺の管理下にあったことがわかる。

寺伝では、天文元年（1532）に鶴岡二十五坊相承院の隆継僧正により創建されたと伝えられる。

また『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』⁽⁴⁾ 田谷村の項には、

定泉寺 東西十八間南北十七間、面積三百零六坪、本村中央ニアリ、武蔵国橋樹郡鳥山村眞言宗三會寺ノ末派ナリ、天文十三甲辰八月六日僧隆繼開基創ス、該寺境内ノ北方ニ小丘アリ、其下ニ長五十間高九尺幅八尺ノ窟及支洞数多存在ス、往古ヨリ其ノ穴タルヲ知ラズ、天保十三年壬寅創テ郷民佐藤惟明及ビ村落ノ人集合シ農間ヲ以テ之ヲ修繕ス、

加フルニ種々ノ画像ヲ彫刻スルコト数歳、漸ク文久二年壬戌ニ至テ概ネ事成ルト云フ、其窟ハ日中ト雖モ暗幽ニシテ、点火ニ非レバ洞ニ入ルコト能ハズ、予之ヲ熟視スルニ、最初ハ獅子ニ牡丹及登龍下龍ハ奔騰スルカト疑ル、次ニ鷗ノ翱翔スルヲ看ル、此ヨリ右ニ直折シ僅カ石階ヲ登レバ天井ハ三ツノ幅支ヲ呈ス、夫ヨリ左ニ進メバ西国十六番ノ仏像、亦タ左ニ屈曲スレバ唐崎高砂ノ松、諸仏ハ其側ニ羅列ス、此処ヨリ還ルコト若干ニシテ、右ニ直折スレバ迦陵頻伽及秩父十六番、夫ヨリ南ニ昇リ監レバ天井ニ月及社宇、下ニ数軀ノ仏躰ヲ現出ス、漸々下レバ右に鳳凰左ハ松ニ番ノ孔雀ハ飄然タリ、左ニ繞レバ坂東札所、奥ニ不動明王ヲ安置ス、次ニ南方ニ歩メバ十八羅漢水遊ノ模間ニ注様ハ宛モ活人ニ髣髴タリ、溪水ハヒテ奔泉ヲナス、右ニ行コト十間ニシテ、上ニ天人、下ニカルカヤ、側ラノ亀ハ岩石ニ攀テ登ントス、又左ニ屈曲シテ僅カ進メバ蟠結スル□龍ハ八方ヲ白眼ス、続イテ四国札所或ハ十六羅漢及唐華ノ巧ハ詭奇変態ノ妙実ニ人ヲシテ覺ヘズ感佩セシム。

とあり、田谷洞窟が天保13年（1842）に郷民佐藤惟明と村人たちによって修理が施され、この時に種々の画像を数年間にわたり彫刻し、文久2年（1862）に至って概ね完成したことを記し、また皇国地誌の調査官は洞窟内の様々なレリーフを実際に見分して、その出来映えに感動している様子が窺える。

また定泉寺本尊銅造阿彌陀如来立像〔図1、2〕は、像高43.7センチ。頭頂から足先までの本体のほとんど

どを一鑄で鑄上げ、両手首先（右手第二・三・四指破損欠失、左手首先後補）と両足先を別鑄とする。木造の光背及び台座は江戸時代の後補である。

左手第二・三指で刀印を結ぶ印相や通肩の服制から善光寺式阿弥陀如来像の中尊と考えられるが、左手首先が後補のため断定はできない。やや量感に乏しいものの、端正に引き締まった面貌や破綻なくまとまった衣文などは古様で、大粒の螺髪や強い曲線で表される髪際には宋元風の影響も感じられる。作風から南北朝時代から室町時代初期頃の作と考えられる⁽⁵⁾。

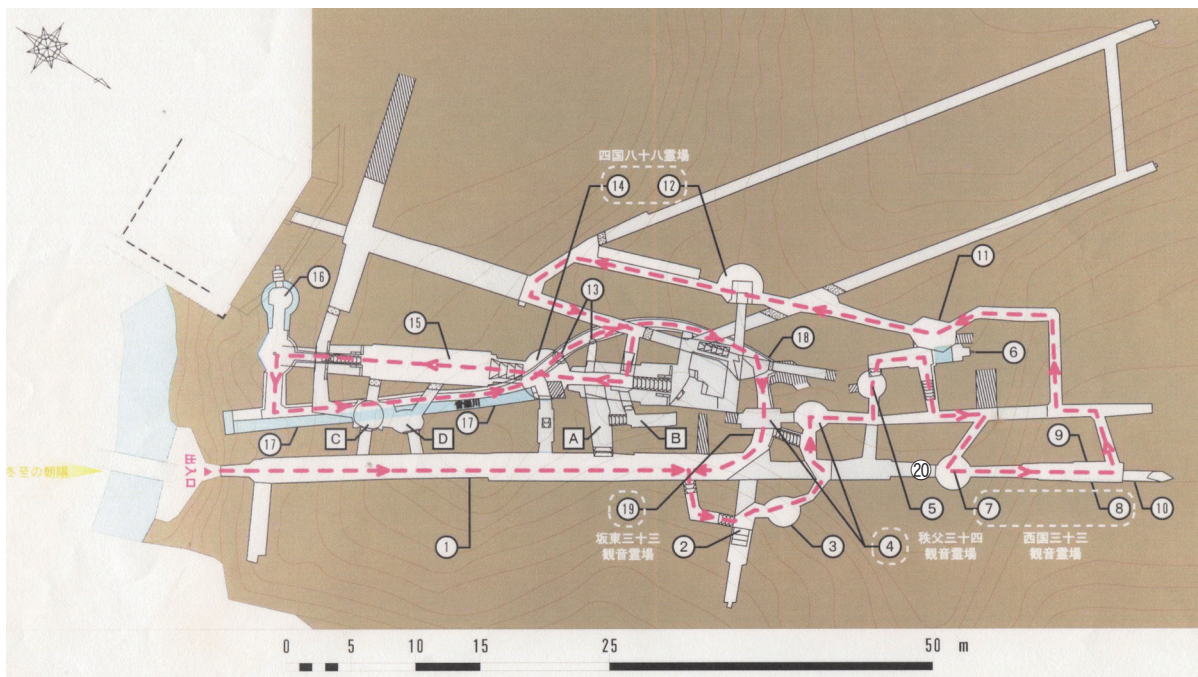


図1. 銅造阿弥陀如来立像

1-2. 田谷洞窟の伝説

定泉寺には田谷洞窟に関わる伝承が伝わっている。伝承を概略すると、

定泉寺の寺地は、鎌倉幕府侍所の初代別当である和田義盛の三男朝比奈三郎義秀の館跡で、洞窟内に弁才天を祀り礼拝していたといい、和田一族が滅亡した嘉暦3年(1213)の和田合戦で九死に一生を得た義秀は、



- | | | |
|------------------------------|-----------------------------|-----------|
| ① 昇龍・降龍、阿吽の獅子、迦樓羅、家紋(天井) | ⑫ 一願弘法大師、兎定紋(天井崩落) | △ 鳳凰・孔雀 |
| ② 旧薬師堂 | 四国八十八霊場(66番～77番、78番～88番) | □ 六地藏・七葉師 |
| ③ 十二支、三つ蝙蝠(天井) | ⑬ 日天・月天 | ○ 十六羅漢 |
| ④ 秩父三十四観音霊場(1番～16番)、迦陵頻伽(天井) | ⑭ 四国八十八霊場(1番～23番)、四十九院種子曼荼羅 | ◇ 花と唐草 |
| 秩父三十四観音霊場(17番～33番、34番欠) | ⑮ 修行道場、五大明王 | |
| ⑤ 金剛界種子曼荼羅、鳥の羽(天井) | ⑯ お水大師、土佐一ツ亀、石童丸と刈萱道心、 | |
| ⑥ 朝比奈弁才天 | 雲中供養菩薩像(天井) | |
| ⑦ 西国三十三観音霊場(1番～17番)、天井崩落 | ⑰ 音無川、十八羅漢 | |
| ⑧ 西国三十三観音霊場(18番～33番) | ⑱ 岩屋不動明王 | |
| ⑨ 高砂の松、曾根天満宮の松、唐崎の松 | ⑲ 坂東三十三観音霊場(12番～33番) | |
| ⑩ 厄除大師、御霊社への真参道(天井崩落) | ⑳ 足柄山の山姥と金時、浅茅ヶ原の鬼婆 | |
| ⑪ 胎蔵界種子曼荼羅、鶴と麻葉文(天井) | | |

図2. 田谷洞窟の現況平面図と洞内レリーフの配置

(田谷の洞窟保存実行委員会作製、一部筆者加筆)

この洞窟から落ち延びたという。

もちろん伝説の域を出ない話だが、洞窟内には今も朝比奈弁才天が祀られ、現在は崩落して確認できないが、洞窟の最深部には御霊社に通じる洞穴が続いていたという。

2. 田谷洞窟の洞内レリーフ

2-1. 洞内レリーフの内容と意味

田谷洞窟内部の壁面には、西国・坂東・秩父の観音霊場や四国八十八カ所霊場をはじめ、密教曼荼羅や十八羅漢などの宗教レリーフ、日本各地の名勝や伝説などを題材としたレリーフが彫られている。ここでは各レリーフの内容と意味を考察する。(図2を参照)

①阿吽の獅子、昇龍・降龍、迦楼羅、家紋(天井)

洞窟の入口に近いエントランス部分には、阿吽の獅子(図3・4)、昇龍・降龍(図5・6)、迦楼羅(図7)がレリーフされ、天井には六家紋(図8)が表される。

獅子は古代エジプトなどで守護獣として入口に祀られたライオンが起源と考えられ、古代インドで仏教に取り入れられ、中国でも河南省龍門石窟古陽洞などに

5世紀に遡る作例が残る。これが朝鮮半島に伝わり狛犬(高麗犬)となり、我が国では神社の守護獣として狛犬が祀られ、寺院では唐獅子が祀られた。古代中国に起源を持つ神獣である龍は、仏教のナーガ(龍王)と結び付き、我が国では古来より水神として信仰された。ここでの昇龍・降龍は、前述した阿・吽の獅子と同様に聖域への入口を守護する意味を持って表されたものと考えられ、近代のものではあるが、東京都品川神社の参道入口には一対の狛犬と昇龍・降龍が表された鳥居が残されている。

迦楼羅は古代インド神話に説かれるガルータ(金翅鳥)が仏教に取り入れられ、八部衆の一人として守護神として信仰された。また迦楼羅が毒蛇を捕食するところから、煩惱を食い尽くしてくれると信じられたことを考えると、田谷洞窟を拝観する人々の煩惱を取り除く役割を期待したのかもしれない。

このエリアの天井には、「丸に埋み桐」・「丸に桔梗」・「井桁に橘」・「丸に違い鷹の羽」・「丸に剣片喰」・「下り藤」の六家紋が彫られている。田谷洞窟開窟に功績のあった施主の家紋と考えられる。



図3. 阿形獅子(区高208.0cm×区幅217.0cm)



図4. 阿形獅子(区高206.0cm×区幅229.0cm)



図5. 降龍
(区高210.0cm×区幅149.0cm)

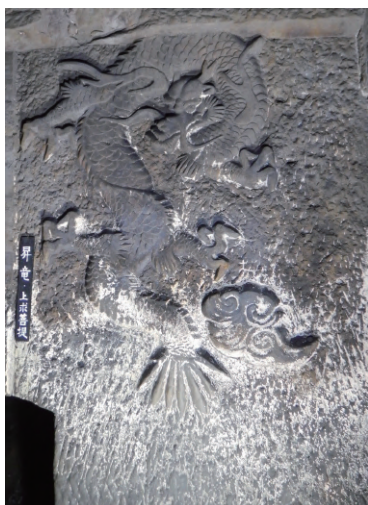


図6. 昇龍
(区高215.0cm×区幅143.0cm)



図8. 六家紋天井
(区長320.0cm×区幅197.0cm)



図7. 迦楼羅(区高87.0cm×区幅188.0cm)

②旧薬師堂

階段を設けた方形の三壁室で旧薬師堂と呼ばれるが、壁面に何らかのレリーフを施した痕跡は認められない。

③十二支、三つ蝙蝠（天井）（図9・10）

ドーム状の天井に三匹の蝙蝠を表し、下部周縁の区画に十二支の干支をレリーフする。中国では、蝙蝠は福を招く動物と考えられており、十二支は、十二方位の守護神または生まれ年の守り本尊として信仰された。辰・巳の一部・午の一部・戌・亥は崩落棄損している。

④秩父三十四観音霊場（1番～16番）、迦陵頻伽（天井）

ドーム状の天井に迦陵頻伽（図12）を表し、下部周縁の区画に秩父観音霊場の一番から十六番までの札

所本尊をレリーフして札番と寺院名を陰刻する（図11）。この内、二番に「廓内米屋三郎」、三番に「廓内金石楼」、四番に「人足方要蔵」、五番に「本町一丁目万屋徳兵エ」、六番に「太田丁八丁目家根や平吉」、七番に「本町一丁目東屋新吉」の施主名が記される。八番にも施主名が記されるが磨滅して判読できない。

④秩父三十四観音霊場（17番～33番、34番欠）

方形の三壁室に、十七番から二十三番（向かって右壁）、二十四番から二十六番（正面）、二十七番から三十三番（向かって左壁）の札所本尊をレリーフして札番と寺院名のみを陰刻する（図13）。

天井に向かって右側は表面が崩落しているが、左側には奥から「八つ菊」・「五七鬼桐」・「剣方喰」・「五七鬼桐」の家紋が表される。



図9. 十二支〈寅・卯〉（区高46.5cm×区幅47.0cm）



図10. 天井〈三蝙蝠〉（径173.0cm）



図11. 秩父観音霊場〈1番～16番〉（総高84.0cm×像高54.0cm）



図12. 天井〈迦陵頻伽〉（径162.0cm）



図13. 秩父観音霊場〈17番～33番〉（総高84.0cm×像高54.0cm）

⑤金剛界種子曼荼羅、鳥の羽と麻葉文(天井)

ドーム状の天井は崩落により損傷が著しい。天井下に区画を造り、唐草文風に麻葉を巡らす(図14)。壁面上部に区画を造り、時計回りで「大日如来」・「阿閼如来」・「普賢菩薩」・「宝生如来」・「文殊菩薩」・「阿弥陀如来」・「観世音菩薩」・「釈迦牟尼如来」・「弥勒菩薩」の順に金剛界五仏と四菩薩を配するが、大日如来を除く梵字は尊名と合致していない。

最終区画に双鉤体による「奉納」と「加藤宗右エ門」、「全伴太左エ門」、「願主人 佐藤七左エ門惟明」の人名と「下り藤」の家紋が陽刻銘される(図15)。

⑥朝比奈弁財天(図16)

寺伝に朝比奈三郎義秀が勧請したとされる弁財窟。尖頭形の天井をもつ方形窟を彫り込んで、奥壁面まで水をたたえる。

奥壁には祭壇を造り、最深部に妻入りの社殿を陽刻して母屋に龕を穿っている。

⑦西国三十三観音霊場(1番~17番)(図17・18)

ドーム状の天井は崩落により損傷が著しい。天井下に区画を造り、「西国三十□□□」と双鉤体で陽刻した扁額を中心に、一番から十七番までを左回りに配列する。各区画は、台座上に札所本尊を浮き彫りし、下部に札番・国名・霊場名を陰刻する。この内、一番に「小雀 小間佐次兵衛」、二番に「岡本 林助右エ門」、三番に「金井玉泉寺、小雀燈明寺」、四番に「金井安藤長兵衛」、五番に「山之内 石工梅次郎」の施主名が記され、この窟の施主が田谷村近隣の寺院や在家であったことが窺える。

⑧西国三十三観音霊場(十八番~三十三番)(図19)

厄除大師へ向う通路に向って右壁面に、十八番から三十三番までを直線的に配列する。各区画は、台座上に札所本尊を浮き彫りし、下部に札番・国名・霊場名のみを陰刻する。



図14. 金剛界種子曼荼羅麻葉文



図15. 金剛界種子曼荼羅
(区高79.0cm×区幅60.0cm)



図16. 朝比奈弁財天



図17. 西国観音霊場〈1番~17番〉(総高78.5cm×幅35.5cm)



図18. 西国観音霊場天井(高348.0cm×径190.0cm)



図19. 西国観音霊場〈18番~33番〉(総高78.5cm×幅35.5cm)

⑨高砂の松、曾根天満宮の松、唐崎の松

厄除大師へ向う通路に向って左壁面に、高砂の松(図20)・曾根天満宮の松(図21)・唐崎の松(図22)の順で陽刻される。

能「高砂」で相生の松と称される播州高砂神社の松は、夫婦円満と長寿の象徴として信仰された。本図にも熊手を担いだ翁と箒をとる姫が表される。

播州高砂の曾根天満宮の松も、菅原道真お手植えの霊松として信仰を集めた。

近江唐崎神社の松は、古くは『古今和歌集』にも詠まれ、江戸時代には日本随一の名松として、芭蕉が「辛崎の松は花より朧にて」の句を残し、広重が近江八景の一つ「唐崎夜雨」の浮世絵にも描いている。

松は冬でも青々とした葉をつけることから古くから

不老長寿の象徴とされ、めでたい植物として珍重された。

⑩胎蔵界種子曼荼羅、鶴と麻葉文(天井)

天井を円形に彫り込んで翼を広げた三羽の鶴を表すが、一羽は剥落している。彫り込み周縁部には、デザイン化した麻葉模様を巡らせて、「丸に桔梗」と「下り藤」を交互に配する(図23)。壁面上部に区画を造り、時計回りで「大日如来」・「宝幢如来」・「普賢菩薩」・「開敷華王如来」・「文殊師利菩薩」・「無量寿如来」・「観自在菩薩」・「天鼓雷音如来」・「弥勒菩薩」の順に胎蔵界中台八葉院の五仏及び四菩薩を種子で巡らす(図24)。各区画は向かって左に尊名を陰刻して蓮華座上に種子を双鉤体で陽刻するが、大日如来を除く梵字は尊名と合致していない。

⑪一願弘法大師、兔定紋(天井崩落)、四国八十八霊場(67番~77番、78番~88番)

円形のドーム型(高322.0cm、最小径240.0cm、最大径379.0cm)で、天上は剥離して崩落しているためどのような図様であったか不明である。天井下部周縁部には、波文に数頭の兎と草花を巡らして、四個の「下り藤」内に「サ」(カネサ)の屋号を入れた家紋を四個配する(図25)。

さらに周縁部下の壁面に二段にわたって区画を造



図20. 高砂の松(区高96.0cm×区幅144.0cm)

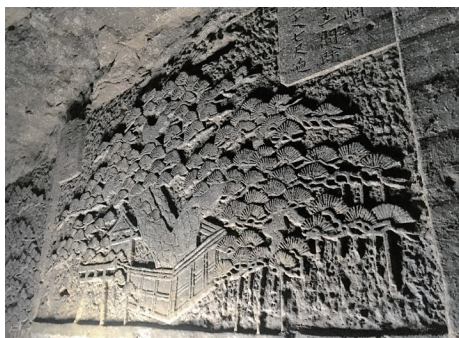


図21. 曾根天満宮の松(区高104.0cm×区幅152.0cm)



図22. 唐崎の松(区高104.0cm×区幅152.0cm)



図23. 胎蔵界種子曼荼羅(麻葉文)



図24. 胎蔵界種子曼荼羅(区高107.0cm×区幅82.0cm)

り、上段に四国八十八カ所霊場の六十六番～七十七番、下段に七十八番～八十八番の札所本尊を左回りで陽刻する。下段八十八番の左壁面には別区画を設けて、四国八十八カ所霊場の国別総数と総距離を掲示する。各区画は、蓮華座上に札所本尊を浮き彫りし、下部に札番と霊場名を、右側に各札所の御詠歌を行書体で陰刻している。また中央部を大きく方形に穿ち、札盤上に弘法大師坐像を浮き彫りする（図26）。

⑬日天・月天

三層階の⑭に至る通路の途中と⑭内から下層に穴を穿ち、日・月形を削り抜いて下層から日天・月天を拝することができる。

⑭四国八十八カ所霊場（1番～23番、四十九院種子曼荼羅）

天井を円形に彫り込んで龍図を表し、下部には様々な草花を台座とした四十九院種子が上段に三十字、下段に十九字が表される（図27）。

四十九院は弥勒菩薩の浄土である兜率天にある内院と説かれ、死者が兜率天に往生すれば未来に弥勒とともに現世に生まれ変わり龍華三会の説法にまみえ

ることができるという弥勒上生信仰に基づいている。四十九院種子曼荼羅の下部には、上下二段にわたって方形区画に四国八十八カ所霊場の一番から二十三番までの本尊が表され、右側の銘文区に札番、国名、寺院名、本尊名、施主名（十五番から十七番は施主名はない）を記している（図28）。施主のほとんどは屋号を記すところから江戸の商工業者とみられる。また五番左側の区画外に「諦翁良歡居士」、「文久二戌年閏八月十日」、「横濱港口丁 谷上〇八十八」と記され、この窟全体に関わった施主とみられる。なお出入口左右の内壁に彫り出される四基の五輪塔は、昭和に入ってから追刻されたものである。

⑮修行道場、五大明王

修行道場は、向かって右壁に沿って床座（長805.0cm、高27.0cm、奥74.0cm）を設ける。行者が床座に坐して瞑想修行を行ったものと考えられる。

五大明王は、不動明王を中心に向かって右側に降三世・金剛夜叉、左側に軍荼利・大威徳の各明王像を彫り出す。

昭和40年代後半に高野山の行者が造立したものでいい、作風も異質である。



図25. 四国八十八所札所本尊・冤家紋
(区高 67.0cm × 区幅 47.0cm)



図26. 一願弘法大師像 (区高 110.0cm × 区幅 95.0cm)



図27. 四十九院種子曼荼羅



図28. 四国八十八カ所霊場 (区高 67.0cm × 区幅 47.0cm)

⑩お水大師・土佐一ツ亀・石童丸と刈萱道心

お水大師は、ドーム状の円形天井に天衣を翻す天女を浮き彫りするが、半分は剥落している。壁面から幅55.0センチ、深さ約33.0センチの水溝を掘り込んで水をたたえている。

中央壁面に天井円形の長方形龕を彫り込み三段の祭壇を造り、奥壁に切妻平入りの宮殿型厨子を浮き彫りし、中央を彫り込んで、別材で礼盤上に石造弘法大師坐像を安置する(図29)。







お水大師龕に向って右側壁上部から地下水が滝状に流れ落ち、壁面には土佐一ツ亀と称されるレリーフが表される(図30)。画面下に岩礁に打ち寄せる波を浮き彫りし、波間にお水大師に頭を向けた一匹の大亀を厚肉彫りし、壁面上部には五羽の千鳥と二羽の燕、一匹の蜻蛉を浮き彫りしている。

足摺岬七不思議の中に、弘法大師が亀の背に乗り不動岩に渡り祈禱を行った伝説があり、「亀石」や「亀呼場」という霊跡が残され、三十八番札所金剛福寺には伝説に基づいて「大師亀」が祀られている。

お水大師龕に向って左側壁面には、高野山奥の院の玉川に架かる御廟橋で道心と石童丸が出会う場面を浮き彫りしている。高野山に伝わる刈萱道心と石童丸の説話は高野山を舞台とする悲哀話で、江戸時代には浄瑠璃や歌舞伎の演目となり民衆へ広がり、浮世絵などの作品も残されている(図31)。いずれも弘法大師と

水に関わる説話を題材としたものであろう。

⑪音無川、十八羅漢(図32～図37)

音無川の上流部は崩落のため煉瓦で塞がれている。22メートル以上に及ぶ十八羅漢図に向かって右端に大きく区画を設け、中央上部に、雲上楼阁と「十八羅漢<漢欠>(双鉤体陽刻銘)」を彫り、向かって右側下部の色紙状区画に「細工人(横書き)」、「 」、「 」、「 椿喜三」と三名の作者名を縦書きで陰刻する。また向かって左側部に長方形の区画を造り、七つの蔦紋を陽刻し、内区画内に「内山仁兵衛(双鉤体)」と陽刻する。色紙状区画に記される三名の細工人は、十八羅漢図の制作に携わった工人名で、内山仁兵衛は施主と考えられる。

通路に向かって右側に音無川(総長2240.0cm、幅94.0cm、深70.0cm)が地下水をたたえて流れ、これに沿って右壁に十八羅漢図が彫り出される。十八羅漢図は、下方に水波を表す遊水羅漢図である。羅漢図の最後に再び銘文区を設け、蔦紋を配した円内中央に「十八羅漢」、周囲の円内に「奉」、「納」、「市」、「舛」と双鉤体で陽刻する。また区画右下の色紙状区画に「細工人」と横書きし、「當所」、「米山弁藏」、「石井友吉」、「石井佐兵衛」、「世ワ方」、「佐藤七左衛門」と縦書きで陰刻する。



図29. お水大師
(龕高150.0cm×像高31.0cm)



図30. 土佐一ツ亀
(区高208.0cm×区幅510.0cm)



図32. 十八羅漢図銘文区
(区高207.0cm×区幅157.0cm)



図31. 石童丸と刈萱道心
(区高200.0cm×区幅265.0cm)



図34. 十八羅漢図



図33. 十八羅漢図



図 37. 十八羅漢図



図 36. 十八羅漢図



図 35. 十八羅漢図

⑱岩屋不動尊

現在金属製の不動明王像が安置される。

⑲坂東三十三カ所観音霊場（12番～33番）

坂東三十三カ所霊場は十二番から十五番と十八番から二十三番までを通路両壁の上部に表されるが、一部は崩落のために失われている。薄肉彫りの本尊の向かって右側に銘文区を作り、札番・国名・寺院名が陰刻される。ただし二十四番から二十九番は、本尊の下部に札番・国名・寺院名が陰刻されるなど形式や作風が異なっている。（図 38A）



図 38A. 坂東三十三カ所観音霊場（区高 63.0cm × 区幅 37.0cm）

⑳足柄山の山姥と金時、浅茅ヶ原の鬼婆

足柄山の山姥と金時は、大坂で演じられた近松門左衛門作の浄瑠璃「^{こもち}軀山姥」を契機に、江戸でも浄瑠璃や歌舞伎の演目として公演されたほか、浮世絵の題材にも取り上げられ広く庶民に浸透していた。

図様は、画面左側に松の幹に右肘をついてもたれかかる山姥が左腕で金時を抱きながら右腕を差し上げて「金」の字を表した扇を掲げる。金時は左足を投げ出して山姥の膝の上で左乳房を吸う。また二人の前では二匹の烏天狗が対峙して、足柄山の伝説を絵解きしている（図 38B）。

一方、浅茅ヶ原の鬼婆は浅草浅草寺の観音菩薩にまつわる伝説で、江戸時代には歌舞伎や浮世絵などの題材となった。田谷洞窟の図様は、観音の化身である稚児に刃物を手に襲い掛かろうとする鬼婆の足にしがみ

つき、懸命に止めようとする娘の姿を画面いっぱいに表しており（図 39）、歌川国芳作の「観世音靈験一ツ家の旧事」を手本に制作されたものと考えられる（図 40）。旅人に旅先での油断を戒める意味があるものと考えられる。



図 38B. 足柄山の山姥と金時（区高 141.0cm × 区幅 225.0cm）



図 39. 浅茅ヶ原の鬼婆（区高 126.0cm × 区幅 243.0cm）



図 40. 観世音靈験一ツ家の旧事 歌川国芳作
神奈川県立歴史博物館蔵

㊦ 鳳凰・孔雀

入口からエントランスを過ぎてしばらく進むと向かって左側に二層目に通じる側道向かって左壁に鳳凰が、右壁に孔雀が表される(図41、図42)。鳳凰と孔雀は仏教では吉祥をもたらす鳥として親しまれている。鳳凰は五本の尾を伸ばして羽を広げて振り返る姿で左上に草花を表す。一方の孔雀は大きな尾をもつ雄を手前につがいで向き合う姿で右上に松を表す。いずれも画面一杯に表され、羽の模様などは丁寧に線刻される。二層目に通じる側道は、崩落のため塞がれている。



図 41. 鳳凰 (区高 110.0cm × 区幅 354.0cm)



図 42. 孔雀 (区高 114.0cm × 区幅 194.0cm)

㊦ 六地藏・七薬師

さらに孔雀図から右上に向かって階段が作られ、尖頭形の天井をもつ横長の部屋が設けられ、向かって右壁上部に六地藏立像(一軀欠失)と左壁に七薬師坐像が対面するように表される。本体と蓮華座及び頭光を薄肉彫りし、表情や衣文線などは線刻に近い。また尖頭形の天井には雲と太陽、中央に一羽の燕を表す(図43)。

㊦ 十六羅漢 ㊦ 花と唐草

崩落した窟内にあり、拝観順路には含まれていない。未調査。



図 43. 六地藏と七薬師 天井の燕 (区高 114.0cm × 区幅 194.0cm)

2-2. 宗教レリーフの芸術性

洞内に彫刻される様々なレリーフは、美術史的に評価されるようなものではなく、秩父三十三カ所霊場[④]の札所本尊が素人的な稚拙な作風であるのに対して、四国八十八カ所霊場の札所本尊は着衣の表現に変化を持たせるなど彫技の差異が認められる。

四国八十八カ所霊場[⑫]のご詠歌などの銘記が行書体で記される点などから、これらレリーフの制作が和紙に描いた本図を平らに成形した壁面に貼り付け、あたりを付けたうえで彫り込んでいったものと考えられる。

また高砂の松、曾根天満宮の松、唐崎の松[⑨]や足柄山の山姥と金時、浅茅ヶ原の鬼婆[⑳]などは、薄肉彫りながら絵画的な構成がなされており、松葉や樹皮、頭髮や着物の柄などの細部に至るまで緻細な彫りが施されている。これらの表現は浮世絵や名所図会などの手本があったものと考えられるが、彫刻というよりは欄間彫刻や鏝絵の彫技に近いものがある(図44、図45)。



図 44. 高砂の松 (部分)



図 45. 足柄山の山姥と金時（部分）

2-3. 施主と制作時期の問題

田谷洞窟自体の開窟時期については、寺伝では建久年間（1190～1199）とするが史料的な根拠はない。洞内のレリーフの制作時期についても、前述した明治時代の地誌『皇国地誌』では天保13年（1842）に郷民佐藤惟明と村人たちによって修理が施され、この時に種々の画像を数年間にわたり彫刻し、文久2年（1862）に至って概ね完成したことを記している。佐藤惟明については、洞内の金剛界種子曼荼羅〔⑤〕の施主の一人として名前が刻まれる。

また武蔵国橘樹郡生麦村関口家の当主が、宝暦12年（1762）～明治34年（1901）の間に五代にわたって記録した『関口日記』〔6〕の安政6年（1859）8月14日の項に、次のような記述がある。

十四日辛亥晴天

相州鎌倉郡田谷村真言宗定泉寺ニ
昨年中〆洞穴出来いたし候趣ニ付
見物ニ参ル戸塚手習師匠医師
案内村内檀方ニ而御霊社脇六右衛門と
申者頼見物同村藤ノ木七左衛門と申者
尚又来り再度案内為見申候

安政5年（1858）に田谷村定泉寺に洞穴が完成したので戸塚の手習師匠の案内で見物に行き、御霊社脇に住む六右衛門という檀家に頼んで見物した後に、同村の藤ノ木七左衛門の案内で再び見物したというのである。藤ノ木七左衛門は『皇国地誌』に登場する佐藤惟明であろう。

田谷洞窟内に記される銘文に制作時期を示す年記を記すものは確認できない。十八羅漢図〔⑰〕に二種類の銘文区があり、それぞれ異なる施主名と細工人が記される点からも、大規模なレリーフ制作にはかなりの年月を要したものと考えられる。ここでも世話方とし

て佐藤七左衛門の名前が記される。

唯一、四国八十八カ所霊場〔⑱〕の枠外に「諦翁良歎居士」の没年として文久2年（1862）の年号が記される。各札所に記される施主の多くは江戸の商工業者とみられるが、彼は「横浜港〆」とあり横浜在住者であったようである。この年記は『皇国地誌』が洞内レリーフの完成を文久2年とした根拠となった可能性も考えられる。

また各窟の施主についても、西国三十三カ所霊場〔⑦〕の施主が田谷近隣の寺院や在家であるのに対し、秩父三十三カ所〔④〕の施主として記されるのは、横浜居留地に隣接する関外の遊郭やその周辺の本町や太田町の商工業者である。横浜が開港した安政6年（1859）にできた港崎町の遊郭は慶応2年（1866）の火災で現在の羽衣町付近に移転する。六番札所の施主名に「太田丁八丁目家根や平吉」とあり、太田町が八丁目まで拡張されたのが文久元年（1861）であることから、この窟の制作はこれ以降であることがわかる。

3. 田谷洞窟の歴史的意義

3-1. 三枚の木版画

田谷洞窟を表した三種類の木版画の存在が確認できる。

一枚目は横浜市歴史博物館に所蔵される「相模国鎌倉郡田谷村田谷山定泉寺略縁起」〔7〕という木版画である（図46）。この木版画は洞窟の拝観ルートを図面に表し、各レリーフを簡略的に図絵して名称を記し、「元日や亀甲山尔露の夢 誠拙大和尚」という和歌を載せる。左下に版元が記されるが判読できない。右側の区画に次の縁起を記している。

相模国鎌倉郡田谷村田谷山定泉寺略縁起
抑当山の岩屋尔安置し奉る弁財天の神尊ハ当地の
郷主朝比奈氏」
守り本尊勧請詣し処夫尔以来霊現日々あらたかなり其外千神万佛」
洞窟ニ現し給ふ一度拜禮乃輩ハ七難即滅七福即生
御誓願うたがひなし

<」は改行を示す>

さらにその下の区画に、

戸塚宿ヨリ 一り十丁
藤沢ヨリ 一り八丁
江の嶋ヨリ 一り半
鎌倉ヨリ 一り三十丁
金澤ヨリ 三り

とあり、近隣の要所から田谷洞窟への距離を記している。

またこの木版画は、金剛界種子曼荼羅〔⑤〕、胎蔵界種子曼荼羅〔⑩〕、一願弘法大師と四国八十八霊場〔⑫〕など、洞窟西側部分を中心に存在しているはず

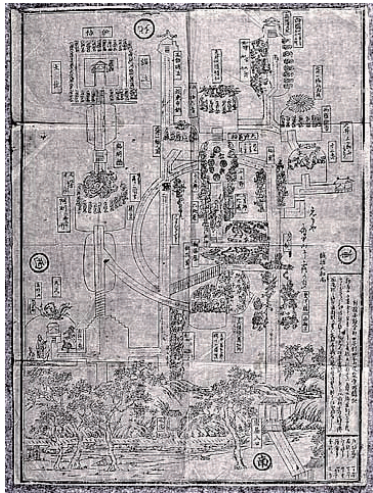


図 46. 相模国鎌倉郡田谷村田谷山定泉寺略縁起 横浜市歴史博物館蔵
(縦 59.0cm × 横 46.0cm)

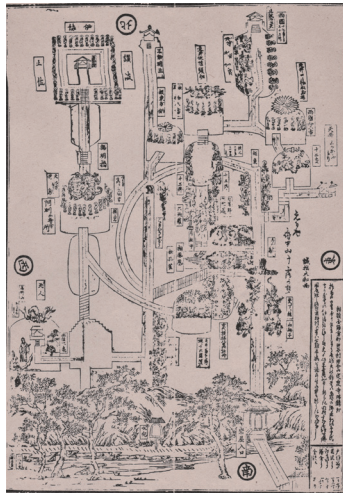


図 47. 瑜伽洞古図 定泉寺旧蔵 (法量不詳)

のレリーフが欠落している。また北側部分にある足柄山の山姥と金時、浅茅ヶ原の鬼婆 [20] も記載されていない。洞窟の複雑な構造上、割愛されたものと考えられる。

二枚目は、前述した昭和 50 年のサンフワークラブ・ロアジールアカデミー研究会の「田谷山定泉寺瑜伽洞(田谷大洞窟)調査報告書」に紹介されている「瑜伽洞古図」と呼ばれる木版画で、当時は定泉寺に所蔵されていたが、現在所在不明になっている。配置などは横浜市歴史博物館蔵の木版画とほぼ同じで書体も一致する。しかし秩父三十四観音霊場 [4] の部分の記載の一部がなく、改定された同木版によって製作されたものと考えられる。江戸時代末期のものと考えられる(図 47)。

三枚目は、明治 20 年(1887)に開版されたもので、横浜氏戸塚図書館に所蔵される。前出した二枚とは内容は一致するが、和歌の位置と書体が異なっている。枠外に、

明治二十年十月一日 御届

編輯兼 出版人 佐藤七左衛門

とあり、編輯兼出版人の佐藤七左衛門は『皇国地誌』に天保 13 年(1842)行われた田谷洞窟修理の中心人物とされる佐藤惟明と同一人物と考えられる。この木版画には「相州鎌倉郡田谷山定泉寺略絵圖」と題した定泉寺境内を表した木版画と添書きが付されている。添書きには、

願主 佐藤七左衛門

大船停車場ヨリ十七丁

石井友吉
全金五郎
米山弁蔵
椿喜三郎

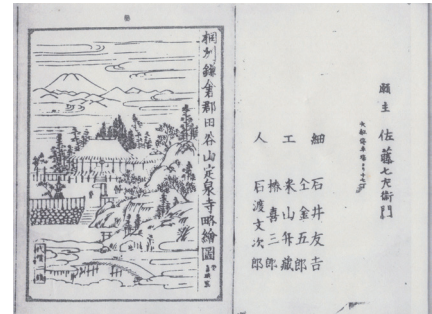


図 49. 相模国鎌倉郡田谷村田谷山定泉寺略縁起 横浜市戸塚図書館蔵
(縦 24.0cm × 横 16.0cm、折たたみ)



図 48. 相模国鎌倉郡田谷村田谷山定泉寺略縁起 部分 横浜市戸塚図書館蔵
(縦 62.0cm × 横 43.0cm)

石渡文次郎 (細工人のみ横書)

とあり、細工人には十八羅漢 [17] の細工人 4 名の名前が含まれている。またこの略絵図の右下に「彫工真眠寫」、左下に「代價二銭」とあり、二銭で頒布されていたこともわかる。大船停車場(現 JR 大船駅)の開業は明治 21 年 11 月 1 日であり、約 1 年前に大船停車場開業を見越して新たに改訂された木版画であると考えられる。

3-2. 庶民信仰からみた田谷洞窟

江戸時代の庶民の移動は厳しく制限されていたが、伊勢詣などの信仰の旅については殆ど制限なく通行手形が発行されていた。十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』の流行に代表されるように、江戸の庶民は講中などを作って伊勢詣などの信仰の旅を行うことが横行した。特に江戸から比較的短い時間で行ける相模国伊勢原の大山詣や箱根の湯治などは人気があり、その多くは江島詣や鎌倉の古社寺参拝などを行い江戸への帰路についた。

こうした霊場巡りの流行から、各地に西国・坂東・秩父の各観音霊場や四国八十八カ所霊場の写しが作られ、実際に本霊場への旅ができない庶民たちが参拝するという民間信仰が盛んとなった。

田谷洞窟のある田谷村は戸塚宿または東海道原宿から鎌倉へ至る脇街道沿いに位置し、伝存する木版画に

は戸塚・藤沢・江島・鎌倉・金沢から田谷洞窟までの距離が記されており、交通の利便性をアピールしている。金沢は金沢八景の景勝地であるとともに、江戸から東京湾沿いを通る鎌倉道が通じているほか、裕福な庶民は海路を利用して金沢に入り、朝比奈切通しを経由して鎌倉に入った。

旅の目的は様々だが、田谷洞窟を訪れば、西国・坂東・秩父の観音霊場はもとより、四国八十八カ所霊場を一度に参拝することができ、しかも弘法大師の旧跡や各地の伝承や名所を見学することができる訳である。田谷洞窟は江戸時代の旅のテーマパーク的存在であったということが出来る。洞窟内に様々なレリーフが彫られた幕末期は、まさに日本が開国の道をたどった動乱期で、神奈川でも安政6年(1859)に横浜が開港し、文久2年(1862)には生麦事件が、翌年には井土ヶ谷事件など不穏な事件も頻発していた。しかし庶民は意外と淡々と日常生活を続けており、かえって神仏への信仰心を強めて信仰の旅も行っていたようである。

4. 田谷洞窟の保存活用計画

4-1. 田谷洞窟の現状

田谷洞窟の地層は、第四紀後期の数十万年前に形成された長沼層といわれる多くの貝の化石を含んだ比較的柔らかい堆積岩からなるため乾燥すると脆くなるが、湧き出す地下水の影響で湿度は常に90～100%に保たれており、レリーフの崩壊を防いでいると考えられる。

長年にわたり地域の史跡として守り続けられてきた田谷洞窟であったが、近年の気象変動や地域開発などの環境変化による崩落などの損壊が進行し、将来的な存続が懸念される状況となっている。またこのような環境変化に伴って、苔やシダなどの植物や粘菌類が発生して、急速に洞窟内の劣化を進めている。さらに洞窟内には常に地下水が流れ込み、豪雨の後には低層部の一部が水没する環境も問題となっている。

現在、田谷洞窟の周辺では横浜環状南線の高速道路



図 50. 阿形獅子部分の苔類 図 51. 洞窟内の粘菌類

の建設が進められており、今後洞窟を形成する里山に多大な影響を与えることも懸念されている。

4-2. 田谷の洞窟保存実行委員会の活動

地域と連携しながら田谷洞窟と共存する都市近郊農村の里山・農村風景の維持のための地域共存型の文化財の在り方を考え、具体的なアクションプランの検討と実施を進めることを目的として、平成29年に「田谷の洞窟保存実行委員会」(代表田村裕彦氏)が発足し、地質工学による基礎調査⁽⁸⁾、地理・地形・空間基礎調査⁽⁹⁾、文化財学による基礎調査⁽¹⁰⁾の各部門による学術的調査が進められている。

また平成30年から2年間にわたり「イタリアと日本における人間活動に資する地下空間資源の劣化度評価と保存修復」というテーマでイタリア国立研究会議(Cnr)と日本学術振興会二国間共同研究助成を受託し⁽¹¹⁾、二国間での地下遺構の相互研修や日本地球惑星科学連合(jpGU)2019年大会での講演及びポスター発表など国際的な共同研究を行った⁽¹²⁾。

さらに2019年からは、横浜市立千秀小学校との大小連携プロジェクト⁽¹³⁾を行って田谷洞窟に関わる講座や模型製作などを行い持続的な保存活動を継承する目的で地域教育にも取り組み、一般社団法人地理情報システム学会の「初等中等教育におけるGISを活用した授業に係る優良事例表彰」で国土交通大臣賞を受賞した。

4-3. 田谷洞窟の保存活用計画

このような「田谷の洞窟保存実行委員会」の学術的調査研究を踏まえて、田谷洞窟の保存を推進し、調査研究から得られたデジタルデータを保存活用して後世に残していくことを将来的な目的としている。

おわりに

今回は、田谷洞窟内に残されるレリーフ群について文化財的側面からの考察を行った。全国的に見てもこのような大規模な地下遺構は珍しく、江戸時代末期の制作ではあるが、壁面に施された様々な題材のレリーフは当時の庶民信仰を考える意味でも意義があるものである。

田谷洞窟のレリーフ調査には、その都度ご住職渡辺隆人師と「田谷の洞窟保存実行委員会」代表田村裕彦氏の多大なご協力をいただいた。また数回にわたる撮影調査には高校生ボランティア杉山暉君(当時金井高校)、中藪綾さん(当時鶴見大学付属高校)、実測調査には鶴見大学大学院生の森咲音氏及び福島治樹氏のご協力をいただいた。末筆ながら、厚くお礼申し上げる。

注

- (1) サンフラワークラブ・ロアジールアカデミー研究会「田谷山定泉寺瑜伽洞（田谷大洞窟）調査報告書」1975年 サンフラワークラブ本部
- (2) 吉田 孝「現代名刹シリーズ1 鎌倉の密教地底伽藍 田谷洞窟」2008年 宗教工芸社
- (3) 『新編相模国風土記稿』第五巻 1998年 雄山閣
- (4) 『神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌』1991年 神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会
- (5) 今回、定泉寺のご厚意で、改めて本尊銅造阿弥陀如来立像の撮影をさせていただいた。
- (6) 『関口日記』第十四巻 横浜市文化財調査報告書 第八号 1979年 横浜市教育委員会
- (7) 横浜市歴史博物館ホームページ 収蔵資料紹介から引用
- (8) 埼玉大学小口千明准教授研究室による、地盤地質現地確認、サンプリング、洞内湿度モニタリング調査、サーモスタット撮影調査、破壊試験（室内試験）、非破壊試験（現場試験）、洞内表面析出物分析、二酸化炭素測定。
- (9) 北海道大学早川裕弉准教授、東京大学（CSIS）小口高教授、筑波大学小倉拓郎助教による、SfM（Structure from Motion）解析による三次元写真測量、TLS（Terrestrial Laser Scanner）地上レーザー測量、UAV（Unmanned Aerial Vehicle）空撮調査。
- (10) 緒方による、洞内レリーフのデジタル画像記録撮影調査、レリーフの考察、銘文解読、年代推考。
- (11) 2017年にイタリア研究会議（Cnr）から共同研究の依頼があり、埼玉大学小口千明准教授を代表研究者として日本学術振興会の二国間共同研究助成（「イタリアと日本における人間活動に資する地下空間資源の劣化度評価と保存修復」）を受託し、緒方も共同研究者の一人となった。2018年6月にイタリア研究会議のメンバーが来日して日本で巡検を行い、10月には緒方を含む日本チームがイタリア研究会議（Cnr）主催のレクチャーミーティングに参加を含めた12日間のイタリア巡検を行った。翌年も受託が継続され、イタリアと日本チームが相互訪問して巡検や研究会を開催した。
- (12) 日本学術振興会の二国間共同研究の一環として、日本で行われた日本地球惑星科学連合（jpGU）2019年大会にイタリア研究会議（Cnr）と合同で参加し、各種セッションにて講演とポスター発表をおこなった。
- (13) 横浜国立大学守田正志准教授研究室を中心とした保存実行委員会のメンバーが、田谷町の横浜市立千秀小学校と連携して、田谷洞窟に関わる様々なプロジェクトに取り組んでいる。